

史談

2011 (H23) 10・20

■ 鮎貝城主 本庄氏ゆかりの地を訪ねて

10月1日。史談会のバス研修にはじめて参加しました。たくさんのことを見て、聞き、知り、参加させてもらって良かったと思った一日でした。

事前学習もせずに参加したことに少し後悔していたのですが、バスの中で参加者16名皆さんからのお話がとても参考になりました。

村上城主であった本庄繁長。その後、時代(とき)の流れで村上城から福島城主へ。その後に本庄氏の子孫が鮎貝城主として上杉家の命令で着任したとのこと。現在は、本庄氏子孫は北海道の厚岸町に在住。本庄氏とゆかりの深い廣居さんも同行され、今でも交流や連絡をとられているとのことで時代の流れを感じながら期待が膨らむなか、村上市に到着しました。



おしゃぎり会館で村上市観光ガイドの板垣さんと合流。みごとなガイド内容には大きな拍手でした。「おしゃぎり」＝「山車」。村上市には、山形と同じ長井町、庄内町、小国町があることや、臥牛山の村上城主の本庄繁長は「越後の龍」と呼ばれ、勝利のみの猛将であったこと。村上城跡に登り約450年前の情景に思いを馳せる。城下に見える三面川。城下の町づくりが、今も町おこしに活用。先人からの多くの贈り物を活かし” 鮎・酒・人情(なさけ)”とは、なんとみごとなキャッチフレーズだろうと感心しました。

最後に、一つの疑問が残ったのは、本庄氏の後、村上城は大国実頼が城主となったが、その後、関ヶ原の

戦いなどの事情によったのだろうが、何故、大国氏は、白鷹町滝野に在住していたのだろうか。大河ドラマ「天地人」でも注目されたが、わからず仕舞いになっていた。歴史とは、わからないところを探求するあたりが醍醐味なのだろうか。

白紙状態からの村上市は、白鷹町との交流も多く、またゆっくり訪れたい街でした。企画していただいた皆様に感謝申し上げ、次回も是非参加したいと思えます。
(竹田 伊智子)

■ 版木・「薬師経御寶札」のこと

先日、近くの金澤寺の総代をしている馬場さんが「寺の屋根裏から版木が出てきた」と教えてくれた。早速に見せてもらおうと、まさしく墨に汚れた版木で、かなり刷られたあとがうかがえるものだった。文字は「奉転讀薬師経御寶札 金剛山」とある。「金剛山」は金澤寺の山号で、ちなみに院号は「瑠璃光院」である。寺の境内には薬師菩薩をまつる堂宇が建っていて、秋には文殊尊と合わせて青年会による祭りが行われている。昔は獅子舞のほかには俵神輿が出ていたが、獅子舞が一時期とだえたので、神輿を夏の皇太神社の祭礼に移して今に至っている。夏の日盛りに子供らが歩く様子を見て、元の形にしては、という話もある。

ところで版木にある「転讀薬師経御寶札」だが、この種のお札は見たことがないだけでなく、そもそも薬師経を「転讀」する(大般若経のように最初と最後だけを読んで全部を読んだことにする)というのもない。とは言ってもこの版木の裏には明治二十四年という年号と、当時の住職らしい人の名前が書かれているところを見ると、かつては「転讀」されていたのであろう。薬師瑠璃光如来は病氣平癒の仏として現世の利益を求める人々の信仰を集めている仏である。この点、あの世の救済を説く阿弥陀佛とは対称的で、古くから国や民衆の安泰など、広く願いを聞いてくれる仏様とされてきたのだが……。さてさてどんなものやら、である。(草)

■ 自家発電

1

確か小学校の五年ごろだったと思うから、かれこれ

五十年余り前のことになる。学校の理科か社会の時間に、冬の雪道を歩いて自家発電している個人の家を訪ねたことがあった。場所は笠松地区の上流の方で開拓に入った人の家だった。

そこでは近くを流れる臼ヶ沢から引いた水を更にパイプと樋で屋敷裏に引き入れ、家の裏で自家発電しているのがあった。雪に埋もれた穴の中には丸太で組まれた木製の箱があり、中ではパイプから流れ落ちる水がしぶきを上げて飛び散っていた。水車は回っていたせいか形は良く見えなかったが、近くに裸電球がひとつ灯っていた記憶がある。

当時の学校では、クラスの皆で水力発電の現場を見学に行くことなどは簡単でなく、おそらく水力発電の実際の様子を見せるために、教師が連れて行ったものだろうと思う。その近くから通ってくる生徒も数人いて、道案内のような役をしていた。

ほとんど忘れていたような記憶をふいに思い出させたのは、この地震や津波、その後の原発事故などの騒然とした世情である。五十年前といえば、今のよう

2

にホームセンターに行けば何でも手に入る時代ではなく、まだ世の中にはいろいろな物が不足していた。

水力による自家発電をしていた人は白兔出身の高井末吉（明治三十六生）という人で、四人の子供をかかえて戦後、開拓に入ったという。戦前の一時期は「郡是」に勤め、異動で工場を廻っているうち召集になり、軍隊生活をしてきたという。その時代に水力で発電したということで気になるのは、材料に何をを用い、どうやって調達したか、更に発電についての知識をどこで得たのか、ということである。この「高井末吉」という人の場合、「郡是」での仕事やその後の軍隊での生活からして、電気の基礎知識を得る機会は少なからずあったと想像できる。手先のきく人だったというが、それでも実際にそのことに取り組ませたのは、やはり「開拓」という過酷な生活であったろうか。

その場所は笠松の集落から臼ヶ沢沿いに、山道を一キロほど上っていったあたりだった。今では人家もなく、杉の林になっているから見当もつかない。目を凝らすと木立の先に笹が生い茂っている平地があり、このあたりだろうと思われる所がある。まわりからは鳥

の鳴き声と近くを流れる沢の水音しか聞こえない。かつてこの山あいの地に、夫婦と子供らが身を寄せ合っていたのであろうか。



ここで育った一人である高井祐視子さん（荒砥在住・昭和十八年生）は当時のことを、「水車は自転車の部品に手を加えたようなものだった気がする。電灯が暗くなると、父から水の取り入れ口につまった木の枝や葉っぱを取り除いてくるように、何度も言われた。水車がよく回ると明るくなる。材料はどこから集めてきたか。どこで電気のことを覚えてきたか、わかんね。電気の球は家の中にいくつもなかった」という。

話からは肝心な電気を起すしかけのところが、どんなものだったかはわからなかった。つまり、沢からどれくらいの水を引き、何メートルほどの落差があったのか。あるいは、水車はどんな形状のもので、どれほどの回転数から何ワット程度の電気が得られたかといった、初歩的な水力による自家発電の実態というのはほとんどわからないままである。

一方、山口地区では姫城の植木写真屋さんが水力による自家発電をしていたという。植木さんは早くに鮎貝駅前に下ったが、隣に住んでいた中川順一さん（昭和五年生れ）の話によると、「電気は昭和二十年に周囲の四軒、同時にきたが、それまではランプでホヤの掃除は子供の仕事だった。道路の脇の川に水車をしつけて、道端にはモータを入れておく小屋があった。電気は二十ワットが四、五個ついていた覚えがある。川は道路とあわせて改良になったから昔とかなり違うが、人の背丈ぐらいの落差があって子供らが水溜りで泳いだりしていたものだ。植木さんという人は腕のいい写真屋で知られていたから、若い時に化学の知識を得るかたわら、電気のこと学ぶ機会があったに違いない。それだけでなくいろいろなことを工夫する発明家みたいな人だった」という。（川）